

折紙



芝宮須磨子

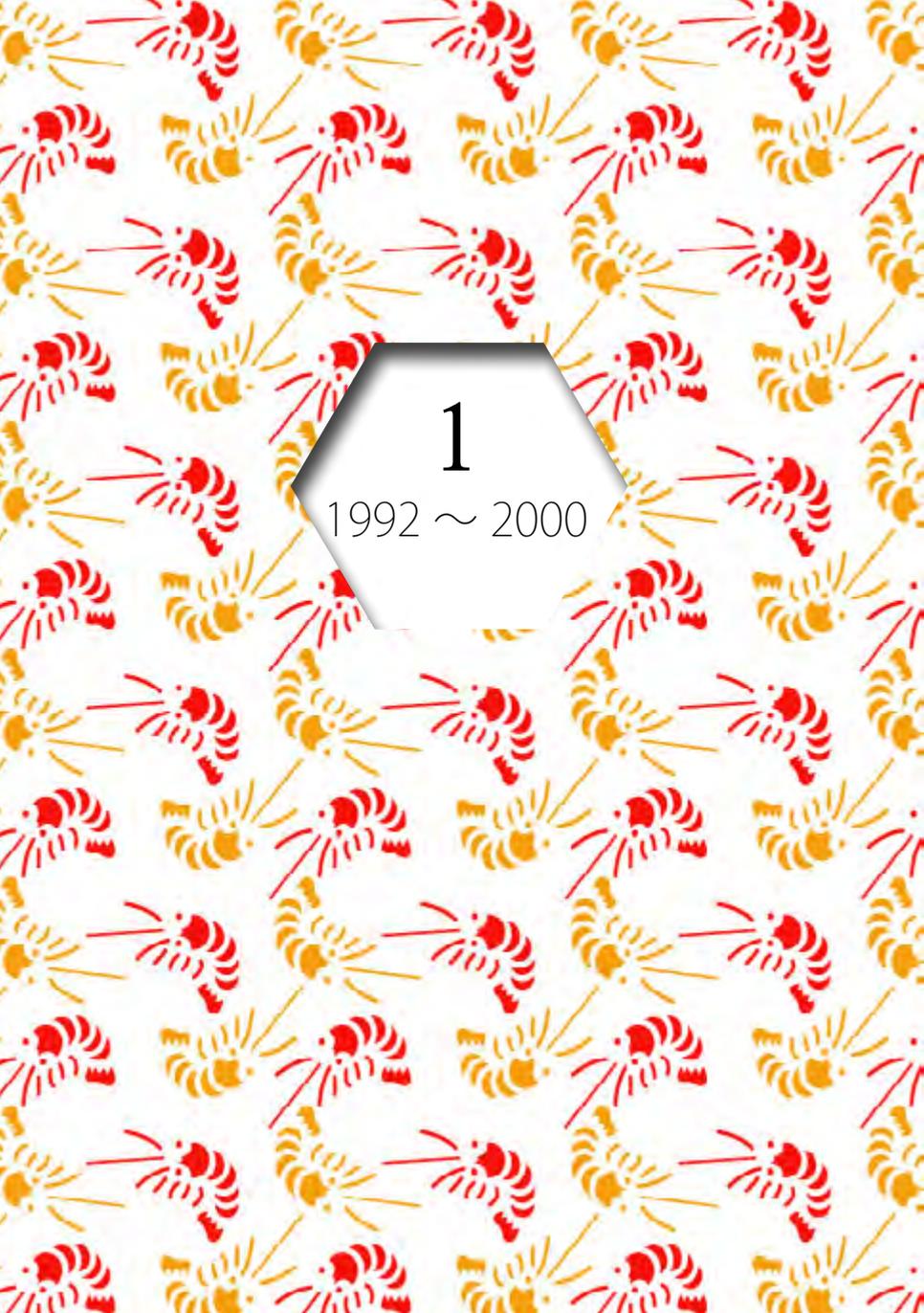


折紙

芝宮須磨子

あを創刊十周年記念句集

限定二十部



1

1992 ~ 2000

背中より大きくゆれてランドセル



甲斐駒の土の凍てたる土まんぢゅう

黄泉に行く衣たくされ餘寒かな



病む人に天使であらざる余寒かな

水槽に天明の刻字梅雨の冷



影踏みを孫ときそひて汗しとど

秋愁の漁火遠く銀河めく



ガラス戸に亡母を見しは冬の暁

花冷や孫の温もり宮参り



末孫の入学式のリボン結ぶ

ぬぎすての小さき靴や水遊び



ふるさとの家紋は丸一夏座敷

蝉時雨
ブロック塀の長い道



丁寧
に
蜜柑
の
皮
剥
く
夫
悲
し

胸底
に
鎮
め
し
も
の
あ
り
寒
の
入
り



二人して闘病終る寒の明け

節分会夫と別れの誕生日



通夜の灯を守りて明けし雪の朝

逝く人に雪を散華と思ひけり



握手していでし病舎や寒の月

悴みて葬の若者雨に立つ



時雨るるや一人の膳本押しやりぬ

父祖の地へわたる渡良瀬春がすみ



価値感の違ふことある四月尽

さるすべり天まで咲いて季うつり



駒下駄の互ひ違ひや夏の雲

葉袋カサコソと鳴るそぞろ寒む



冬の闇千人針の記憶あり



ふるさとがふるさとでない秋の駅

風
花
や
青
葉
城
址
の
常
夜
灯



駒
糶
り
の
往
時
彷彿
初
詣
り

切り口を揃へて水屋の櫛炭

春裕真砂女の指の節たしか



空
耳
か
雪
降
る
朝
の
夫
の
声

う
な
づ
く
人
ほ
し
い
と
思
ふ
五
月
か
な



お施餓鬼の大師の傘も慈雨にぬれ

眼科医を出でて眩しい夾竹桃



敗戦日耳かたむけし駅舎古り

秋さむし手摺の遺る夫の部屋



秋光の甲斐駒迫る父の墓

初木枯参道吹きぬげぼんのくぼ



春立ちぬ女神の小指真似てみる

夫逝きて近くなりたる山の墓



歯みがきのチューブをしぼる四温かな

二月や童のやうに夫逝けり



牡丹見て雨の上野の迷ひ道

岩かげの無縁佛に卯浪割れ



ころげ茄子厨の西日はすかいに

熱帯夜吾にもありし修羅の時



奥多摩の山里深く秋灯

青虫がその気になつて山椒の木



温泉の敷石まるくちちろ虫

新宿に思ひ出さがし古外套



吹きぬけの芙美子の家の雪景色

時計屋の指針まちまち春立つ日



着ぶくれて記憶の街に紛れ入る

三寒の土手に墨絵の渡し舟



公園の忘れ自転車遅日かな

菜種梅雨自販機さぐるホームレス



赤皮のノートなくした戦火の日

ゆずられて着ぶくれの身を納めける



シ
ネ
マ
果
て
銀
座
の
夜
の
春
時
雨

梨
の
花
咲
か
せ
て
留
守
の
老
夫
婦



父に似た釣行身支度禁日

もののけに肩たたかれし昼寝かな



台風過大蛇が下る利根の川

太郎と云ふ老犬逝けり白山茶花



新年会
明治
大正
昭和
かな

絹の喪服
父に逢ふこと
悲しめり



無縁墓に何か伝えて土用波

現世はいつも二番手迎へ盆



短夜や友と語りし古き恋

逝く人にとむける挽歌梅雨しぐれ



秋光に加美舎清兵衛墓古りぬ

飛び種や墓所の日溜まり金盞花



ブ
ロ
ツ
コ
リ
ー
喜
寿
の
長
姉
の
畑
よ
り

闇
遠
く
甲
府
盆
地
の
秋
灯
し





2

2001 ~ 2006

散歩靴歪んで減って十三夜

二十世紀大半を生き
新たな



甲府盆地万華鏡めく初明り

夫の忌を修す山寺芽吹きどき



夫の忌や黄泉のことづて春一番

まさかの坂いくつか越えて秋さやか



か
ら
す
瓜
緑
の
山
の
句
読
点



鍵
穴
に
鍵
の
す
ん
な
り
星
月
夜

父の忌の寺領明るし実南天

善光寺極楽の鍵冷えびえと



恋猫の恋の行方や不眠症

自分史に泣き笑ひして花見膳



蝶々や塀の向ふは迷路かも

父母眠る山河やさしく真夏日に



肌
寒
や
遠
き
明
治
の
一
葉
館



か
ま
へ
ず
に
物
云
ふ
仲
の
か
き
氷

老どちのシャネル大島新年会



103

鍋横の鍋やの由来熱爛に

102

春の雨母校見下ろす夫の墓

墓守の腰の手袋涅槃西風



築山の裾よりつづく著莪の花



春の朝ハワイ土産のマグカップ

夾竹桃
吾子
洗禮の
遠き日
を



初鮎を
供へて
しばし
父の
そば

鵺
の
舞
ふ
か
に
交
す
箒
川



杉
並
木
往
古
閉
ざ
し
て
秋
夕
焼

大
門
松
今
半
上
野
広
小
路



久
に
逢
ふ
吾
子
と
夕
餉
の
秋
刀
魚
焼
く

微睡を肩たたたかれて牡丹雪



テーブルの下から冷ゆる針仕事

きさらぎや八十路長いか短いか

シャボンの香残る指先余寒かな



石塔を洗ひて供す春の水



鳥曇三河島まで髪切りに

街角に処を得たる董草

迎え火もおくるも一人盆終る



甘露煮の蝗めでつつ酒うまし



姉許りに安らけくあり朝寝せり

棚
経
の
僧
の
説
教
国
訛



漆
黒
に
螢
の
浮
游
谿
深
く

秋
祭
夫
み
ま
さ
ば
と
軒
提
灯



合
歡
の
花
そ
つ
と
ね
む
ら
せ
通
り
過
ぐ

過
去
帳
を
和
尚
繙
く
小
春
か
な



散
り
敷
き
て
ニ
セ
ア
カ
シ
ア
の
花
白
く

秋
晴
の
吾
妻
溪
谷
ラ
ラ
ラ
ン
ラ



131

下
町
の
駅
の
改
札
水
仙
花

130

お
日
様
が
山
に
腰
か
け
刈
田
道



路
地
好
き
に
連
れ
の
あ
り
け
り
星
月
夜

折鶴の白に紅さし御慶かな



父祖の地へ久に詣りて返り花

木槌打つ父の手撓ふ足袋仕上げ

136

その昔足袋屋の暖簾風にゆれ



137

納吟会李白の詩文御箱とし

図書館へ行きも帰へりも冬帽子



晩学に時の足りない師走かな

立春や父の遺せし言愛し



七色に染まりし冬の水平線



読みかけを積んで枕辺朧なり

寒桜触れさうに行く山の辺を

山に添ふホテルの窓の冬銀河



彼岸桜
お稲荷さん
の赤い旗



147

大鳥居
階に踏む
櫻蕊

146

父に似て噓の大きき春の風



如月や夫を送りし季めぐり

身辺になんでも置いて余寒かな

春宵やフジ子へミングそして私



畳屋の二代目今夏で店じまい



バス停の小さき椅子に白日傘

畳屋の
仕事場
広し
金魚玉

吉原つな
ぎ浴衣
さらりと
男前



塩原の田舎芝居とかき氷

156

もの知りと秋のみちのく二人旅



157

澄む水を手桶に満たし夫のもと



寄席噺に笑つて忘れ夜の秋



3

2006 ~ 2010

一人居の風呂溢れさせ冬きたる



木の葉散る寺領の奥に昔あり

コンサート夜の銀座の四日かな



葱の香に厨房の朝活気づく

三万日生きて今日あり桜餅



医王寺の句碑にまつはる花の影

万愚節はらからみんな歳重ね



人の世は眞直ぐでない麦青む

山吹に名残りの雨か妹の忌



隅
田
川
俯
瞰
し
て
過
ぐ
夏
の
旅

炉
塞
の
指
美
し
く
灰
な
ら
す



落日の名残の雲や蝉しぐれ

捕虜の日を語らぬ人と心太



秋晴や車窓にメレンゲのやうな雲

バージンロード父と娘に秋高し



秋の夜や現世いとし父母遠く

兄弟会欠席七人秋思かな



入れ替に夫のイニシャル冬衣

晩年と云ふべき歩み冬すみれ



新玉や父のよはひを越えました

初コンサート夢の世界にしばし酔ふ



こはれさうな心の箱に冬銀河

ひとときを吾子と手作り紙ひいな



春燈や眞砂女きらひと云ふ人と

残雪が夫逝きし日を語りかけ



透
明
な
傘
の
向
う
の
椎
若
葉

櫻
咲
き
愛
と
い
ふ
子
の
教
職
に



閉店の土間の広さや春寒し

たんぽぽの絮吹く不透明な世へ



同窓の真砂女も
みたり花の土手

手桶の水切つて
手渡す濃竜胆



終
点
の
バ
ス
の
車
庫
裏
白
槿

俳
人
の
寡
黙
の
歩
み
秋
の
雨



鮎釣に魅せられ過ぎた夫在りし

鮎釣や吹き渡る風親父かも



太子様のお笠も杖も炎天下

遠き日に息をひそめし原爆の日



秋高し腕に覚へのをりがみ展

菜箸を巧みに使ひ菊膾



運動会
美しかりし
母の居し

立冬や
日差し
背に受け
折紙を



末っ子の
新築うれし
年祝

『放浪記』
有楽町は余寒かな



独り居に若松活けて良しとする

雪柳さえざえとして萌え立ちぬ



庭梅の咲きて今年も兄に会ふ

忘却などありえぬ戦火五月の夜



抜
け
道
の
静
か
な
家
の
山
法
師



長
旅
の
異
国
の
孫
の
春
た
よ
り

折紙の試行錯誤に明易し

つとに受く批判適確青嵐



罽毘のカボチャなじみて故郷の味

欠け焙烙ひき出して焚くお迎へ火



仕りし田植なつかし鎮守様

みすずかる信濃は夏と恋文に



その時はその時と決め敬老の日

浜町で芝居見物秋裕



いらだってバス待つ真昼白扇子



折れ口に老どち集ふ秋の雨

日記帳時々白紙年つまる

木の实落ち毀れるやうに認知症



炉
開
の
切
口
美
し
き
桜
炭

一
筋
に
生
き
た
友
逝
く
冬
の
菊



家々にある物語冬の月

行き交ふ人皆善人に納め不動



北風や意志あるごとくレジ袋

除夜まゐり本堂までの豆灯籠



冬の夜ユニットバスに窓はなく



下萌えの夫のふるさと嫺やかに

俳句手帳 二月三日の贈物



狭い部屋配線あまた春浅し

隠しごと少しはありぬ四月馬鹿

清明や高く吟じて友卒寿



胡瓜揉み箸一膳の厨ごと

春深し金鷄勲章残し逝く



雀の子お地藏様の肩を借り



エイサ舞ふ幼ひたむき花の下

その事をつげたき人や夏かすみ

弾みつけ石段登る椎若葉



香魚焼く夫が好みし瀬音して



弟とメール交して傘雨の忌

お
守
り
を
少
年
腰
に
夏
休



舞
ひ
舞
ひ
て
す
と
別
れ
行
く
夏
の
蝶

白
木
槿
五
十
年
忌
の
墓
前
か
な



夕
虹
や
青
梅
街
道
に
橋
架
か
る

青
空
を
桃
色
に
染
め
百
日
紅

女
郎
花
地
主
不
在
の
庭
で
咲
き



言の葉を紡ぐわらべに秋日和



言の葉の届かぬ黄泉へ曼珠沙華

友
逝
き
て
白
粉
花
の
赤
白
黄

月
見
団
子
母
の
指
先
な
つ
か
し
く



檜
山
節
考
吟
じ
て
い
た
り
納
吟
会



輪
の
外
で
幸
せ
た
し
か
む
お
正
月

坂の道いぬふぐり咲き金平糖

初釜や装へる子をまぶしめり



日
和
雨
赤
い
長
靴
下
萌
に



点
滴
の
お
ち
る
早
さ
に
冬
日
射
す

川狩や小さき靴を並べ置き

自販機にふるさとの水街暑し





折紙

著者 芝宮須磨子（折紙も）

発行日 2011年3月15日

発行人 佐藤喜孝

装丁 佐藤喜孝

発行所 竹僊房

製本所 武蔵製本

二〇〇一年創刊の「あを」は来年で十周年を迎へます。「九邀」の詩のやうに「花を藝うゑて以て蝶を邀まふべし。……書を藏して以て友を邀ふべし。徳を積みて以て天を邀ふべし。」ではありませんが、正に良友を邀へるべき俳句を作る、これが「あを」の一つの目標です。そのころを形に表したのがこの『限定一部』の句集です。

この句集はあを編集部のデータベースにある『あを』『飛行船』『獐』句会・吟行等のデータより作家各人が二百五十句抄出し発表年代順に一本にまとめたものです。句集名は喜孝が興の赴くまま付けさせていただきました。

二〇一〇年十一月八日

佐藤喜孝